

団長の心のものさし

ピアニスト
の存在は
指揮者以上

発表会の域を超えた演奏 ～カントダモーレ演奏会～

7日夜、お城ホールにおいて第28回カントダモーレ演奏会が開かれた。観客席はほとんどガラガラだったが、演奏内容はこの手の催し物としてはしっかりと聴ける出来栄であった。

カントダモーレは声楽家の針谷斐子先生の弟子たちで構成されるグループ。年間2～3回の演奏会を行っている。これも意欲的だ。

プログラム構成に特筆するような内容があるわけではない。いわゆる発表会的な要素の強い演奏会である。それでも演奏は興味を持って聴けるのであるから、出演者の皆さんの日頃の音楽活動に対する努力の賜物であろう。師匠である針谷斐子先生のお人柄、音楽性によるところも大きいだろう。

歌を生かすピアノ演奏

一番強く感じたのはピアニストの力だ。今回は6人のピアニストが弾いた。それぞれに特徴はあるが、歌を心得た演奏、それに裏づけされた技術を持っている。けっして腕前を見せびらかすような演奏は微塵もない。歌い手の呼吸をしっかりと感じ、でしゃばらず、かといって引っ込んでいるわけではない。しっかりと歌をリードしているとさえ感じるほどだ。また、その音楽に対する読みの深さ、愛情にも好感が持てる。たとえば星合智美さんの弾いたアルファードには、彼女の思いが見事に音に表れていた。いつも貪欲に作品に向かう姿勢がよく表れていた。Amazonからの荷物で足の踏み場もない部屋だというのが良く分かる(笑)

合唱においてもピアニストの影響は計り知れない。指揮者など比較にならない。ピアニストは音を出しているからだ。指揮者が王様だとすれば、ピアニストは影の権力者、

皇后や長老のようなものだ。本番ではなおさらである。ピアノは決して伴奏ではない所以だ。いいピアニストとの出会いは音楽の幅を広げる。また、稽古ピアニストとしての役割も重要だ。万能性が求められる。こんな地方にこれだけのピアニストがいるなんて、素晴らしいことだ。



思いのこもった演奏をする星合智美さん

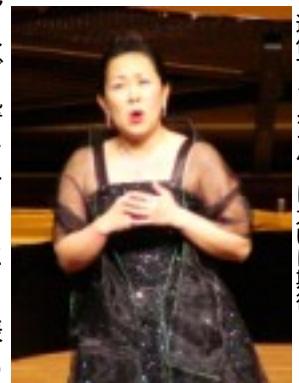
初めて見る魅力を出した

うたおにのメンバーでは操ちゃんがヴィヴァルディを歌った。何度も彼女の歌を聴いてきたが、今回はちょっと(?)変化、変貌しかけているのが見えた！嬉しい。彼女が歌い手としてさらに成長するには、乗り越えなければならぬ壁がある。その一つ一つを大切に消化していつてくれることが、うたおにとってもプラスになることは間違いない。

音楽表現には知性と教養、お茶目さ、大胆さ、そして色気が必要だ。

そのどれ一つが欠けてもダメ。真摯に音楽をやり続けなければ、必ず身につくはず。音楽が表現という形で成り立っている限り、それを目指せば必ずその要素は習得できるはずだ。

人の人生と似ていて、だんだんと歳を重ねれば、若さがそれなりに失われていく。でも逆に得られるものもある。それが人としての“色気”だ。これがもっと出てくれば、うたおにの音楽は他の追随を許さない。



進化するメンバーに大いに期待

名演をされたカントダモーレのみなさん



うたおにの4月5日(月)の様子

練習内容

「コタンの歌」より

船漕ぎ歌

マリモの歌

熊の坐歌

アツシの歌

ムックリの歌

新年度ということで欠席が目立ち、あまり先に進むとちょっと不安なので弱腰な練習？次回もやっぱり少なそうな…。毎年同じ現象が起きているんだけど。

でも練習に参加し歌うことが出来る人が一番幸せなんだよね。それって基本的な考え方だね。そしてそういうメンバーで来れないメンバーの留守をしっかりと守る。それに尽きるね。